

宮川経輝と父

阪 田 寛 夫

この文章を書くために、十年前の私の小説『花陵』を読み返してみても驚いた。うまく書けていたからでは勿論なく、自分の手になる本の中身を、細部に於てはほとんど忘れていたからである。

たとえば私の母方の祖母が大正三年某月某日、娘の縁談を宮川経輝牧師に相談に行く件りがある。宮川牧師は当時大阪組合教会の現役の牧師で、五十代だが夙に大牧師の盛名が轟いていた。明治九年、いわゆる熊本バンドの一員として、花陵、すなわち花岡山でキリスト教の「奉教」を誓い、同年熊本洋学校から同志社に進学、卒業後同志社女学校主幹を経て明治十五年大阪教会から望まれて牧師に就任した人物である。祖母はその教会の執事（長老）の一人で、相談に向いたのは、縁

談が二口あって、相手がどちらも同じ教会員だったからだ。一人は由緒ある家柄の青年、もう一人が私の父だった。父は高等工業を出て、大阪駅裏の長屋を改造した新聞インキ工場をその父親から引きついだばかりである。

ところで祖母は前者を選びたかったらしいのに、彼女の口から父の名が出たとたんに、宮川牧師は、

「阪田君賛成！」

と大声を出して、決めてしまったというのだ。

私がこの挿話を教わったのは、宮川牧師の四女増世さん（現在原田姓）からであった。増世さんはその頃十三歳。早生れだから大阪のウィルミナ女学校二年生で、ちょうど縁側で幼い妹と遊んでいるところだった。話題が

話題だから、遊びはその中で興味津々、座敷の話の成行きに聞き耳を立てたそうだ。もし、彼女がその場にいなかったら、またいたとしても、双方が教会員である若い娘と青年の縁談に興味を持たなければ、私は自分の両親の結びつきについての決定的な瞬間を、ついに知る機会はなかったわけだ。

その大事な逸話を、直接増世さんから聞いて、自分の手で書きとめておきながら、こんど読み返してみても「そんなことがあったのか」と、自分で感心したり驚いたりしている始末である。

物忘れがひどいといえば、私の父も晩年はひどかった。いつも大型の手帳をポケットに入れて、それをたよりに行動していた。昭和三十六年に七十二歳で死んだが、最後の十年間に急速に記憶力が鈍った。ということは、現在の私の年齢で、徴候が現れだしたわけだ。

六十を過ぎて、父はインキ屋の仕事を叔父や私の兄に任せてしまい、その代りにキリスト教関係の団体の役員をたくさん兼任して、東奔西走した。戦後はキリスト教の世界でも東京に力が集中したから、大阪に住んで

いた父にとって「東奔」の割合が高くなった。商用もあったに違いないが、当時夜行の寝台急行で十一、二時間を要した大阪・東京間を、週に一度は往復した。たとえば、昭和二十五年、といえば、父は六十一歳だが、この年三月の手帳を見ると、

- 1日 教団財務委員会
- 2日 日本聖書協会 night train
- 3日 大阪
- 4日 大阪
- 5日 両親、五久夫（末弟） 法事
night train to Takamatsu
- 6日 高松信徒会、映画と講演
- 7日 松山信徒会、にしき丸高浜—高松
- 8日 高知信徒会、映画と講演
- 9日 鴨島修養会、徳島
- 10日 I C U常務理事会、神田 Y M C A 信徒会
- 12日 淀川善隣館評議員会、姫路 Y M C A
- 14日 聖書協会財務、常務理事会
- 15日 Y M 同盟常務理事会、印刷ワニス事業者会

といった調子で、半月の間に四日間しか大阪にいない。この先も、十八日まで東京で I

C U 創立の理事会が続き、十九日は南大阪教会総会、二十一日の休日は同志社理事会、二十二日に横須賀社会館へ再び東上している。体は私と違って至って健康で、アメリカへ募金旅行に出かけても、横浜港や羽田空港に着くや、そのまま夜行列車で帰阪、朝食を自宅で摂り、またふだんと同じように会社へ出かけた。だが、こんな工合に走り回っているうちに、夜行で東京駅に着いてから、何の会合もないことに気がついてとんぼ帰りするような事態も生じた。

父のごとき一介の平信徒が、こんな風に用いられたのは「募金」のためだろう。彼は大阪の実業界では顔だけは古くなったから、直接有力者と談判しては大口の寄附を貰ってきた。

「おれが行くと、ホイトが来たような顔をしやるんや」

と話していたのを覚えている。ホイトは父の故郷の広島言葉で、乞食のことだ。必ずしも愚痴ではなく、多少得意でもあるのだ。

彼はキリスト教のために金を出すのは正しいことで、また本人にとっての至福だと信じているから、迷惑顔の同じ人の所へ何度でも臆

せず金を貰いに行くことができた。

人に出せと言うだけでなく、もちろん自分でも出した。理事会の席に募金の話が出る、すぐポケットに手をつっこんで、

「わし何ぼ出したらええのや？」

と聞くのが口癖だった、という伝説がある。何しろ記憶力の衰えが激しいから、前に金を出したことを忘れ、またポケットに手をつっこんでは、

「あんた、もう出さばったですよ」

と笑われることもあったらしい。父は自分の家と、自分の会社の株しか持っていないから、現金がなくなると、会社から会長職の月給や、配当金の前借りをした。あまり金額が嵩むので、景気の悪い会社の経営を任されている叔父や兄が、父の無断前借りを禁じた。取引銀行からも、

『『正業』に就かんのなら、会長をやめてもらうことやな』

と、叱られたからである。それでも昭和三十六年に父が死んだ時、会社に総計二千数百万円の借金をしていることが分った。

父は中学校二年生の年に、友人に誘われて学校のキリスト教青年会に入り、大阪市江戸

堀の大阪教会で洗礼を受けた。その時から、宮川経輝牧師に心服してきた。心服のあまり、大正十四年に、大阪組合教会が退職した宮川名譽牧師に邸宅を贈呈した時、自分もその隣に土地を買って家を建て、終生宮川牧師の玄關番たらんと心に誓った。大正時代は、大新聞が競って高速輪転印刷機を輸入したのに伴い、当時の職人の勘に頼ったインキ屋の中で、父が「科学的」に粘度を測定して練り上げた新聞インキが徐々に売上げを伸ばし、商売は順調だったようだ。

昭和に入って、世界日曜学校大会が一九二八年にロサンゼルスで開かれた時、父は日本の代員の一人として出席した。これが、キリスト教の仕事に身を入れたしはじめではないかと思われる。というのは、この年父は、「四十歳を過ぎたら、キリストのために働くように」

と、宮川牧師から言われていた年限に達したからである。父の死後、母から聞いた話だ。だがこれは私には、あまり熱心にはやり立つ父を押えるために、逆に、四十歳までは家業に精を出せ、と牧師が親心の忠告をしてくれたのだと思われる。その家業の方も、父

は自分の工場を、近江兄弟社や主婦之友社、あるいは那星製糸にならった、キリスト教主義の会社にて育てようと、これ努めた。株式会社に改組した時、定款に利益の十分の一を宗教・福祉事業に寄附するという一項を入れようとして、

「そんなことしたら、役所で通りまへんで」と忠告されて思いとどまったこともある。

また戦後には、営業部や技術部と並んで宗教部を置き、YMCAから部長を招聘したりもした。不況下にさすがに宗教部は数年後に廃止されたが、こんどは「大阪の阿呆」と自称して、銀行から「正業に就け」と非難されるほど、キリスト、あるいはキリスト教につくして死んだ。

果たして、父のその行為が実際にキリスト教の役に立ったかどうかは、私には分らない。本人は気がつかないで、却って妨げになるような結果をもたらしていいとも限らない。昭和二十年代に同志社で学生運動に携っていた人が、当時の「団体交渉」の相手に父がまじっていたことを、苦い思い出のように私に語ったこともある。

宮川経輝牧師は、昭和十一年二月、大阪教

会の支教会として父たちが創立した南大阪教会の十周年記念礼拝に招かれ、祝福をしている最中に脳内出血で倒れて亡くなった。一週間昏睡が続いた間、宮川家は門をとざし、隣の私たちの家がひきもきらぬ見舞客の受付所、兼休憩所となった。父としては責任上甚だ辛いことだが、思いもよらぬ形で、彼は牧師の最期に「玄關番」をつとめることになった。

「阪田君賛成」

の逸話を読み返して、私は自分の記憶力の減退に驚くばかりであったが、こうして父の生涯を思い直すと、この大牧師から父がそこまで信頼を受けた重みが、歎びと哀しみを帯びて胸に迫ってくる。

父は中学二年の時友人と宮川牧師宅を訪ね、当時一歳だった増世さんの女学生の姉さんたちとも会話を交え、器楽合奏を聴き、パサ砂糖つきのパンと紅茶をご馳走になって「現今の腐敗せるソーシャル・ライフにありて、此のホームこそ清潔なる花園なり」云々の感想を日記に記し、「ああ、新日本の道徳改革は家庭の建設より始めざるべけんや」と結んだのであった。

(作家)

日本の大学教育について

——あるアメリカ人の私的意見——

フィリップ・ウイリアムズ

私は還暦を過ぎた今、感謝をもって、日本で私の人生の半分以上を教師として過ごす事ができて大変幸運であったと考えています。今ここに、この私のわずかな経験を、非常に個人的なものではありますが、お話ししたいと存じます。

ここ数ヶ月間の田辺キャンパスでの新しい経験についての感想から私の話を始めたいと思います。これも大変限られていて皮相的なものではありますが、意味がないとも申せません。田辺での初めての生徒達は、私の覚えている限り、過去二十年間のどのクラスよりも良い反応を示しました。例えば、ここ数ヶ月の出席率は九五パーセント以上で、これは

私の知っている中では、最高記録です。この理由はかなり簡単だと私は思っています。つまりキャンパスの近くに、ビデオゲームもマージャン屋もパチンコ屋も、つまり誘惑するものが全くないからです。ある意味で、この新しい出発の新鮮な雰囲気は、私に太平洋戦争後の日本の大学生活を髣髴とさせます。妻と私は昭和二十五年に、新日本といわれたこの国へ参りました。私達は若い英語教師として英会話のクラスをもちました。また妻は家族関係学を教え、私はアメリカ文学を教えました。それは無残な戦争の爪跡の残る仙台市の東北学院大学でした。当時、大学の教室でさえ、いまだ爆撃の跡を残していました。

た。雪がガラスの割れた窓から吹き込み、机の上を覆いました。学生達は手袋をはめた手で一生懸命ノートをとりました。もちろんこの凍えるような部屋に暖房らしきものは何一つありません。教師達は何枚もセーターを着て、教室を歩きまわりました。体を暖めるためです。しかし学生達は本当に熱心でした。彼らは全力を出し切って勉強に打ち込みました。戦中戦後の十年間の苦しみのおと、彼らは勉強という学生の本分に没頭しました。当然のことながら現在、彼らの多くは日本中で優れた教師となっています。(一九七〇年以降、何度か中国を訪れましたが、私はこれと同様な猛烈精神を中国の学生達の中に見出しました。)

こうした感慨は、今は老人となつてしまつた一外国人の偏見に過ぎないかも知れませんが、私は一般的に見て、現在の学生達は、三十年前大学において勉強した学生達ほど熱心に高度な勉強をしていないと思うのです。現在、学生達のまわりには、誘惑が満ちあふれています。運転免許の取得、バイク、テレビ、スポーツ……。そして保障された豊かな生活は更に学生達を安易な道へと導きます。

これら外面的ものの以外に、日本の教育制度や組織のもつ問題性が、更に大学生生活を安易なものに変えてしまっているのではないでしようか。

数年前、私はある講演を頼まりました。私は『日本における大学教育の十の問題点』という皮肉なテーマを選びました。この一人のアメリカ人が偏見を混じえながら意見を述べたのです。(西山仙先生が同時通訳をして下さって、彼はすばらしい技量を発揮されました。彼が第八番目の問題を通訳している時、私はまだ第七番目を話しているといった様子でした。)日本の大学教育の中には多くの不備な点があるのです。しかしそれにも関わらず、多くの日本の学生はすばらしい成果をあげています。それが皮肉な点だと思ふのです。私の考えの多くは馬鹿げているかもしれませんが、あえてここに述べさせて頂きましよう。

第一に、もちろんあの悪名高い『入試制度』です。学生達は大学に入るために大変な苦勞をいたします。そして合格した後は、その疲勞から回復するために休養の数年を要する訳です。あるアメリカの学者が最近これに

ついて書いています。日本人が勉強しなくていいのは人生においてただ三つの時期だけであると。五歳までと六十五歳から、そして大学に在る間のこの三つだけだ。

第二の問題は学年です。桜の花と共に始まるのはいいですが、ゴールデンウィークで授業は中断され、どんな授業を受けていたかすら忘れる者もあるでしょう。年間にたった二十五回位しか授業が行なわれないのは私達外人教師にとって実に奇妙です。欧米では少なくともその二倍は授業をしているのですから。日本では勉強にとって大切な時期に長い休みが始まることになっているように思われます。

これは第三の点にも関係しています。日本ではある大学で一人の学生が一週間に二〇科目も勉強しています。これでは先生の名前すら覚えられません。アメリカでは一つの学期に取れるのは多くても五科目です。ふつうは四科目だけです。

第四番目に入りますが、日本の大学の図書館はおもに教師が利用しています。日本の学生達が年間に借りる冊数は、欧米の学生達が一週間に借りる冊数よりも少ないのです。

こういう状況にあって(第五のポイントですが)サークル活動が学生の時間の主導権を握るのです。多くの大学のESSが大学のカリキュラムの中の英語教育よりはるかにすばらしい成果をあげていることを私は確信しています。

私の教師仲間、学生の就職の際、クラブのOB会の方が個人の学業成績よりも大きな力を持っていると教えてくれました。これは第六の点です。日本の企業は初めの一年間に研修を行います。そしてこの研修こそが日本において重要な教育になってきているということです。

このような状況の中で、当然といえば当然ですが(第七の点)教師達が教育に挫折を感じるので。彼らの教育という奉仕が明らかに実りがあればいざ知らず、彼らはその報われない思いを個人的研究や著作にぶつけるのです。

ところで(第八の点)学生はこの繁榮した日本の社会においてアルバイトをすることになります。熱心になり——バイクを買い、国内外旅行をし、ステレオを買い、魅惑的な娯楽に熱中し——またある学生達は反抗ののろし

をあげて闘争し——どちらにしても勉学とは関係がありません。

第九の点ですが、外国人にとって、日本の大学で一番奇妙なのは、単位をとれなかった学生が在学できるといことです。カリフォルニア大学は入試なしに学生を受け入れますが、一学年の終わりにには、半数以上の学生が六十点以下という理由で退学させられるのです。その後は七十点以上でなければ大学にいられません。

最後の点は私の最大の偏見ではないかと思いますが、私にとっては、物価との比較で考えると、日本の大学の学費ほど欧米に比べて安いものはないということです。食物は他のどこより高く、パンというより米は更に高く、車の値段は四、五倍も高く、税金、ガソリン、高速道路とすべて高い。衣類も家賃も、もちろん土地も更にずっと高い。自動車教習所の一ヶ月の費用は大学の一ヶ月の学費より高い。(アメリカでは自動車学校は高校の授業の一部です。)ところが、同志社を含む日本の一流の大学では、学費はアメリカの同レベルの大学の四分の一ほどです。

もしこのように大学教育が安く手に入ると

するなら——少なくともこの偏見に満ちた私の目には——学生が大学教育に第一義をおかない理由が理解できるのです。

以上述べました十の問題点は的を得ていないと思われるかもしれませんが、種々の点で外国人の偏見にすぎないと思われるかもしれません。こうした問題の判断は相関的なものだと思います。しかし私の意見に同意された多くの日本人の先生方もあります。考えようによっては、私の意見は他の日本の先生方から伺った話のまとめとも言えます。

しかし大学教育についての私の意見や偏見にも関わらず、私は日本のある学生達は非常にすばらしい成果をあげていることを認めないわけにはいきません。多分、そしてこれこそ皮肉なことですが、この日本の教育における問題点こそが、学生達にすばらしい成果をあげさせているのです。トインビーの歴史の法則は、この逆説を説明してくれます。もし生活が容易であれば進歩は少なく、日本の教育が多く困難を持っていればいるほど、すばらしい進歩をとげるのです。何故なら、困難によって人々は更に熱心になるからです。アメリカにおいては『天才的』な学生達です

ら、十科目やそれ以上の科目を一度にとることはできません。しかし日本においてはそれができるので、意欲のある学生達はその能力の限界に挑戦できるのです。

私が望むのは、このすばらしい田辺キャンパスで勉強できるといふ恵まれたチャンスによって、このまじめな学生達の数が更にもっとふえてゆくことです。

この新しいキャンパスの美しい自然環境の中にあって、よりアカデミックな精神を建設するチャンスを与えられているのです。同志社ファミリーの多くが——父兄、教職員、校友——が、この世界で最も進歩した国に、この新しい環境を創り出すために多くの犠牲を払いました。今日、日本の教育制度が直面している多くの問題点とチャンスに、積極的に臨んでゆきたいものです。

(大学文学部教授)
邦訳 佐治夏実 (昭和五十九年大学文学部英文科卒業)

池袋清風の同志社学生時代

末光力作

同志社社史資料室長、河野仁昭さんの編集で歌人池袋清風の同志社学生時代の日記「池袋清風日記―明治十七年上・下」が先頃刊行された。既に本誌前号の新刊紹介欄で、同志社女子大学の中 皓教授が書評を書いておられる。これには当時の同志社学生生活が詳細に書かれていて、私も楽しく読ませて頂いた。清風は寮で毎週土曜に歌会を開き、寮生に歌の指導をしていたが、その様子なども記されている。先づ気が付くことは社史の中で著名な人びとが多数出てきて親しみを覚える。同志社第八代総長の原田 助、哲学者の大西 祝、同志社の宗教主任として尽力した堀 貞一、同志社女子教育のため長年貢献さ

れた片桐 哲のご尊父、片桐清治、牧師として、後に実業界で活躍した山岡邦三郎などが出てくる。教員側では新島校長をはじめ化学の下村孝太郎、宣教師のデビス、グリーン、ゴールドンなどもよく出てくる。

さて、私はつぎの三つの事柄に特に興味をひかれたのでここに述べてみたい。即ち、
(一) 牛乳 (二) 水浴 (三) 蹴球である。先づ牛乳であるが、清風は健康のため毎日のように牛乳を一合、時には二合飲んでゐる。当時としては中々ハイカラな行爲である。そのころ牛乳は一合四錢五厘していたが、風呂代が五厘の時代だから決して安くはない。そもそも京都は牛乳に関してはかなり古い歴史

を持つてゐる。明治五年、京都府知事、長谷信篤は加茂川荒神口の旧練兵場跡、現在の京都大学薬学部や医学部のある場所に京都牧畜場を起した。府民に牛乳や肉を普及するためである。当時は「牛の乳を飲めば角が生えてくる。」とまことしやかにささやかれていた時代である。こんなときに一般に牛乳の栄養を説き、医者にも病人に勧めさせてその普及を計ったことはかなりの卓見であった。東京遷都で火の消えたようになった京都を近代化して活力を与えようと、同志社創立者の一人、山本覚馬や先覚者の明石博高らが計画して全国に先駆けて日本最初の小学校（柳池校）、女学校（女紅場）、集書院（図書館）、舎密局、織殿などがつぎつぎと設立されたが、牧畜場もその中の一つであった。この牧畜場は明治十二年、小牧仁兵衛に払下げになり民営に移行したのであるが、清風の学生時代も此処が京都では牛乳を購入できる唯一の場所であった。そんな訳で、同志社の外人教師たちも此処から牛乳を得ていたのである。のちに宣教師グリーンは自宅で乳牛を飼育し、家僕に搾乳させているが、清風は時どきグリーン家を訪ねておこぼれを頂いたり、余りを

友人に飲ませたりして牛乳の普及に一役買っている。明治十七年十一日の日記に牛乳に關する面白い記事があるので一部を紹介しておく。

「西京ニ牛乳ヲ公売スル処ハ、荒神橋向ヒノ牧牛場ノミ。故ニ吾出京以來、此処ヨリノ一売夫野村善六、毎朝及午后同志社ニ持來ルヲ用ヒタル也。而シテ他ニ競売ノ処ナキニヨリ価高ク、一合四錢五厘（米國辺ハ一升五錢ノ由、幾ント十倍）ナルヲ、吾ハ一ヶ月一円許ツ、數年間用ヒ、殊ニ当夏ヨリ日ニ二合モ用ヒシ故、六月ハ金二円、其後一円五十錢許ノ平均。百五十名ノ生徒中、牛乳ヲ常ニ用フル者僅ニ數名、其一ヶ月ノ金モ凡二三十錢也。吾如キハナシ。」

このように記している。清風はその後、一合三錢の良心的な牛乳屋を見つけ、以後、荒神口の牧牛場からの購入をやめて、加茂の牛乳屋に鞍替えしている。牛乳は今日、自動販売機でいとも簡単に入手できることを思うと、誠に今昔の感がする。

つぎに「水浴」であるが、清風の一日の日記の終は必ず「水浴」で終っている。日記によるとめつたに銭湯へ行っていない。欧米人

は元來、日本人のようによく風呂に入る習慣がなく、その代りよく身体を冷水もしくは湯で拭くが、清風は外人教師のこの習慣に習ったのだろうか。銭湯に行かない代りに「加茂川に水浴に往く。」とか「加茂の社の下流に浴す。」或いは「相国寺内細流に水浴す。」といった記事が目につく。現在の加茂川は汚れていて水浴するには程遠いが、當時は充分水浴ができる程の清流だったのだろう。昭和のはじめ、私の子供の頃は下鴨神社のみたらし池から流れる清流が境内を南北に流れていた。清風はそこで「みそぎ」をしたのであろう。ところがわからないのが「相国寺内細流に水浴す。」である。十二月二十日の日記にこんな記事がある。

「相国寺内細流ニ水浴ス。或老人曰ク、苦行ヲナサルカト。又一ノ老夫立テ見、驚ケリ。既ニ出ントス。偶門外ノ方ヨリ巡查徐々ニ來リ、苦寒ナルモ出ル能ハズ、更ニ五分間水中ニ在リ、大ニ冷エ寒慄ス。」

さて、現在相国寺内には池こそあれ、細流などどこにも無い。不思議に思つて河野さんにお聞きしたら意外な知識を得ることができた。相国寺の門を入つて道の東側（右側）に

南北に溝がある。あの溝こそ「今出川」の名残という。私は今まで何度か同志社の所在地に「今出川通鳥丸東入ル」と書いてきたが、「今出川」とは場所の名称位に思つて、川の存在についてはさして気に留めなかった。まして相国寺内の溝が「今出川」であるとはついで知らなかつたのである。その「今出川」も現在では梅雨期の豪雨のときにこそ川となるが、普段は干上つてゐる。しかし清風の時代にはかなりの水量があり水もきれいで「水浴」ができたようである。清風の言葉を借りると、「細流静夜幽声ヲ呈ス」とあるから清流が音をたてて流れていたのであろう。由來京都には「小川」とか「出水」とかいった水に關する地名が多い。昔の京都はいたる所に細流が流れ街を潤していたのであろう。羨しい限りである。「今出川」は現在でも跡があるが相国寺の門の所で地下にもぐつて暗渠となり、アーモスト館の前を通り御所に入つて再び地上に姿を現わしていたとのことである。とあれ長年同志社に奉職しているが、最近になってはじめて「今出川」の存在を教えられて大變興味深く思つてゐる。

最後に「蹴球」のことについて触れたい。

清風日記の九月十六日の記録に

「五時、食堂ニテ山岡邦三郎氏蹴鞠運動ノ再興（去十四年末ニアリシ）ヲ生徒ニ促シ、食后同志ト示談アリ。」

さらに十月三十日の日記には

「今日午后四時ヨリカ此前有志輩注文シタル蹴鞠（西洋品、一個八円許カ）来リシ故、此運動遊ヲ礼拝堂ト彰栄館トノ間ノ広地ニテ始メタリ。」

とある。鞠はマリとかケマリの意味であるから蹴球、現在のサッカーのボールと解してよいであろう。一個八円もするボールを有志が出し合つて購入し、恐らくはクロージャーの生



相国寺境内に面影を残す今出川

えていた広地で蹴つたということは誠に面白い。「同志社スポーツの歩み」（一九六〇年刊）の部史の欄を見ると、

「アソシエーション蹴球が同志社で行われるようになったのは明治二十年代からで、当時アメリカから同志社へ派遣せられた米人教師が学生たちに伝えたと言われている。しかしこの頃は未だボールを蹴つて遊ぶ程度であった。」

とある。さらに同志社創立六十周年記念誌「我等ノ同志社」には、

「明治二十一年バートレット教授がコーチし、その後グローバ教授が赴任されて正式にコーチを受け盛んに試合をした。」

とかなり具体的に記されている。グローバは一九〇四（明治三十七）年同志社に赴任しているからその頃からゲームをやつたのであろう。世界の蹴球の歴史を見ても英国蹴球協会の設立が一八六三年、国際蹴球連盟が設立されたのが一九〇四（明治三十七）年で一九〇八（明治四

十一）年ロンドンで行われた第四回オリンピックで始めて正式種目となつたと記されている。日本にア式蹴球が入つたのは一般には一九〇五（明治三十八）年、東京高等師範学校講師デハビランドルによつてコーチされたのが最初とされているが前述のように同志社ではそれよりずっと以前に蹴球が導入されていて、同志社こそ日本蹴球界の草分け的存在なのである。今後、同志社のサッカー史を書く場合、是非この事実を入れて欲しいと願つておこう。今年の春行われた関西学生選手権で同志社は宿敵大商大を2-0で破り十年ぶりで優勝するという快挙を成し遂げた。蹴球はラ式（ラグビー）とア式（サッカー）とがあつて車の両輪のようなものである。ラグビーもサッカーも大いに頑張つて欲しいものである。

日記によると山岡邦三郎が率先してサッカーをやっている。実は邦三郎の息子、山岡望は長く旧制の第六高等学校の有機化学の教授をやり、その熱心な独特の教授法によつて教え子たちの敬愛を一身に集め、六高のシンボルともいふべき名物教授であつた。旧制六高の卒業生が現在でも一致団結しているのは

実に山岡教授がその核であると言っても過言では無い。その山岡が長く六高蹴球部の部長をやり、インターハイで幾度も六高の優勝に貢献したのである。サッカーに関する親子の面白い縁と言うべきであろう。

扉の書簡—新島襄の絶筆—

大磯で静養中の新島襄が、新潟で伝道中の原忠美に送った書簡である。発信地は相州大磯百足屋謙吉方、宛先は新潟県新発田寺町原忠美。書簡の日付は明治二十三年一月十七日で、封筒に一月十八日の消印がある。

この手紙が書かれた一月十七日ころ、新島の容態はすでにすこぶる悪く、十七日には腹部の疼痛が激しくてモト注射をおこなっている。この日、東京から来診した樫村清徳山龍堂病院長は、腹膜炎と診断し、病状は重いことを告げた。

病床につき添っていた人は、八重夫人に電報を打とうとしたが、新島はそれをさし止めて、痛みをこらえながら自ら筆をとって夫人あてに書信をしたため、「私も十一日の夜少々腹痛致し申候、此

その他、清風日記には冒頭に必ずその日の気温を午前と午後に分けて記している。温度を大切にする化学者、下村孝太郎教授の影響かもしれない。これなども貴重な記録であろう。

れは此日外に出の風(風邪)を引候訳なり、俄かに胃カタルを起し候なり、もふ今日はよろしく候」とかいだ。

さらに新島は、新潟県長岡で伝道していた時間恵吉にも手紙をかいいて、長岡に教会堂を建築することを喜び、いっそう力をつくすよう希望して伝道策をつたえている。そしてもう一本、原忠美のためにも筆をとつたのである。

右の二本はどちらが先かはともかく、翌十八日以降、新島の病状は筆をとりうる状態ではなくなるので、この日の書簡を彼の絶筆とみてよい。原あての書簡には、次のように書かれている。

「(略)夫レ伝道は尚戦争之如し、時機を見而進む甚肝要なり。進而取り、取りて守り、守りて而して后其好果を主に呈

清風日記を読むと昔日の同志社教育は寮生活を基盤とした二十四時間教育であったことがわかる。泥酔した寮生が校祖の墓を破壊するのとはえらい違いである。時代が変わったとはいえ、正に今昔の感である。(大学工学部教授)

する也。故ニ早く新潟県下を團結せしむるは、天の吾人ニ新潟全県下伝道之大責任を与へ賜ふたるなり。然るを吾人ニして悠々不斷時機を失ひ、他人をして侵入せしめ、兄弟相争ふの惨状を現出するに至らは、策之決し而得たる者ニあら須。(略)願くハ自由なる福音の活種を越後之原野ニ播き賜へ。繁茂せしむる者ハ神なり」

新島襄の最後の心情吐露である。

原忠美は岡山県の出身で、明治十八年六月に同志社英学校普通科を、さらに二十一年六月に神学科を卒業した。そして四十年十月、明石で永眠するまで、新潟、神戸方面の伝道に四十二年の生涯を捧げた人である。

句集「雪嶺」 発刊にあたって思へる

川 島 保
(俳号 寛治)

庄屋の長男であった父(養父)は、百姓をする苦勞に忍びず一念発起、故郷を捨て、丹

後但馬の山境を越えて城崎村にたどりつき人力車を手に入れた。その足で父は山陰道の宿場町で生活費を稼ぎ乍ら上京。くしくも新島襄先生を客として乗せたことの縁(えに)により、「一番苦しさを覚えた人間が、故郷で今尚苦勞している人達の所に帰り、その人達と一緒に becoming 新しい道を開くのがあなたの生涯の仕事ではないですか」と、説諭されたという。そして、京都で農学を修め、その功な

の境涯が今、走馬灯のように限りなく駆けめぐり感無量である。

私が戦後間もなく奉職した公立校の学事は、旧制中学から新制高校への改革期であった上に、教職員制度の資格規制と配置転換を含んだ教育現場が混乱期であったために、誰しも足が地につかない状況下で教育論も多種多様を極めていた。若かった私は学校長と教育上の理念で生徒側の活動要求に対して、その受けとめかたが校長の意見とくいちがい、やむにやまれず学校を飛び出してしまった。そこでかつて養父がたどったと同じ山陰街道を尺八一本持つて上京。そして無知と無謀ながら、氣骨を買われ、同志社の体育課長であ

った塚本簫之助先生のもとに止宿することになった。もうその時からすでに三十六年の年月が経つ。昭和二十三年岩倉に新制改革で発足した、同志社高等学校に奉職。次いで同志社大学、同志社商業高校と歴任しているうちに、三十一年永島校長のもとで同志社女子中高等学校に、迎えられることになった。

その当初、化学の先生で同中時代永島校長と野球部でバッテリーを組んだ経験の持主である那須先生に体育論をとかれ驚愕をした。

しかし、それにもまして、私の青春時代の末期に大きな心境の変化を与えてくれたのは、同女にはじめて宿泊をとまなうスキー教室を信州野沢で行った時のことである。山の頂を極めることと、スキーで雪尾根を雪煙をけたてて滑降することのみに執着していた私に、同伴して戴いていた那須先生は

“天と地のしづけさつなき橡枯れぬ”

の一句を雪催う天空を見つめ乍ら、一紙にしたためられた。そして川島さん、こんな心境をどう思ふかねと問い正された時、驚異というか五感を通じてふるえるような感動を覚えたことが今も忘れられない。旺盛な体力のみを自負していた私にとって、このさりげなく

詠まれた一句が山を見る目、自然を見る目を
変えた。この萬物を見る深遠な境地の様にも
のに魅せられたことが、五感を通じて覺えた
感動を、記して残し向後の指標にしたいと思
わせるようになった。その当初、女生徒を引
率して白馬登山をした時に作った忘れられな
い一句がある。

偃松の露ふりボッカ荷をぬらす

屈折した露に輝く偃松帯を黙々と登って行
く強力。湧いて来た霧に何時しかその姿も消
えて、肩にぐい込む荷の音のみが、「ギイー
ギイー」と、霧の深部から聞えて来る。(今
はどんな山小屋を作る建築材も糧秣もヘリコ
プターで荷上げしている時代になっている
が、私の山岳俳句のスタートとして残した
此の一句は、全てが人為による労働作業によ
って行なわれていた頃だけに今尚、強力の中
作が、しみじみと胸の深部に身体ごと、何物
かをうったえて来る様に思えてならない。

山に生きる強力が、たまたま下山して来る
のに出くわすと、何か底知れない安堵感を覺
えるのは唯一人私だけではないと思う。

北アルプス、南アルプス、中央アルプスと
唯若さにまかせ、意のおもむくままに駆けめ

ぐって来た当時を思うにつけ、その思い出の
山容の随所で黙々とそれぞれの立場に応じ全
生命をかけて働く強力を愛いとまずにはいられ
ない。仕事を終えたその一人一人が、それぞ
れに山小屋の炉辺に安らぎ、幾杯かのひや酒
をあり、ひたいを油ぎらせ、翌日の仕事を
それぞれに確掌して今迄輝いていた眼光をま
どろませ、大いびきをかき深い眠りに安らい
で行く姿を見ているにつけ、その一人一人に
果てしない哀愁と明日への息吹を感じさせら
れたものである。

爾来、きびしいにつけ、愛しいにつけ自分
が山で感動を受けた、五感を通して記し残し
た句に次の様なものがある。

雲海をつらぬく朝の剣岳

黒百合の露まろび落つ夜明け前

たぎつ瀬の西日に洗ふ遭難碑

咲く朴の峽けふらせて日照雨過ぐ

ホップ刈る野に遠澄める八ヶ岳

天に音なし雲中に咲く座禪草

寝袋のチャックに育つ露すこし

ななかまど雪来て木曾の岳遠し
白樺に淡く照る日や雪来つつ
また天へかへる雪かも峽の風
合宿旗氷塵に裂け潔し

風立ちて月下に煙る霧氷林
紅茸や雨のしみたる木馬徑
熊笹の露はね月下貂とべり

雪催ふ風に戸の鳴る無人小屋
飛雪来し馬を父子の拭ひをり
初明り淨き樹氷に手触れける
雪深く瀬音こもれる樹林帯

氷壁にいとむ風かも闇に鳴る
残雪の月下を占めて野尻照る
月明に氷壁えぐり滝落ちぬ
雪雲の紅さに昏るゝ日本海
山毛櫨林鳴らす未明の春疾風
鳩笛に童女眠れる櫓明り

湿原の昏れて暮鳴く無人小屋

枯るる中来てみほとけに跪く

結氷湖昏れしを渡る灯のひとつ

雲海の渺茫春の三日月

雪林の無垢へ獺犬放ちけり

岩ひばり荷に来て小首かしげけり

おごじよ棲む岩穴霧が閉ざしけり

木の実掌に栗鼠の眼のうかがへり

まなかひに羚羊立てりなななかもど

石仏入れて猪垣組みにけり

月あげて兎躍らす山毛櫨林

声かさね初荷を締むる夜明前

ブロッケン生れて濃霧に立ちすくむ

肅条と噴煙染めて冬日落つ

風音の光りとなりて霧氷咲く

雪嶺を見し浄さもて年越さむ

月光を雪庇に返す夜明前

雪壁へ男のロマンもていどむ

死せる後も尚白馬小屋に泊めてもらいたい

という山に対する男のロマンは、今尚限りなく脈打っている。

人それぞれに紆余曲折があり、私自身も順風満帆の日ばかりではなかったけれども、山とスキー部の良き生徒達とクラブ活動に研鑽することにより私の人生に彩りが増し加わった。スキー部を同女に創部して以来、京都府高等学校スキー選手権大会に初参加で総合且つ完全優勝を手はじめに、十九回もの優勝を重ね、至難でもあった近畿高等学校スキー選手権大会にも優勝、数多くの生徒を京都府代表選手として国体や全日本高等学校スキー選手権大会に送ることが出来、かつ又雪国の選手に伍しても劣らない優秀な成績を修めてくれた生徒達を思う時感謝で一杯である。山岳部でも（現在ワンゲルクラブ）顧問として第一回近畿総体で大台ヶ原に挑戦させ、次いではじめの全国高等学校登山大会で、四国石槌山系を踏破、全国に同女の名をなさしめた時の感動は今もって忘れることが出来ない。

も助かり、強い星のもとに生れたのかと思っていたのではあるが、同女に奉職中或る日突然の交通事故に会った。医師から再起不能と宣告されたがしかし忍従の末、立ち直った。又授業中アキレス腱を切断し、体育教師としての資格ももうこれ迄かと思つたのに、生徒や、教職員の方保護者の皆様の励ましにより、現在昔と同じ様に務めさせてもらっている。幸せな日々が信じられない程である。

今夏停年へむけての境地を極めたく思い、同女の岳人森先生（ヒマラヤ・BK・六、八八五峰を極めた折り、地質・水質・植物研究に功績を残した化学科教諭に同伴して、ワンゲルクラブの生徒達に伍して白山山系を幕営し乍ら踏破した。春夏秋冬ひたすらに北山をはじめ、西山・南山・城山系・湖北・湖南アルプスと森先生に訓練を受けた上での山行でもあり、句集発刊をめざしその資料をもたずさえていただけに、格別重みを感じた山行であった。自然のきびしさと油断の許されない山行のみちすがら、幾種類かの可憐な花がほうようしてくる彩りや、おちこちに聞こえて来る溪声、老鶯の導いてくれる懸崖の歩一歩に、山が好きであったことを通して、常時物

を見る心の目の深さを教えられ俳句に志すことになったえにしの尊さをしみじみかみしめている次第である。その心を糧として

角笛の音の夕焼けて遙かなり

群羊と天地溶け合ふ大西日

といったシルクロード旅情や

癒へてなほ癪の翳もつ泰風

島に墓地なし故郷なし雁わたる

など隔離島での病者と一体となって奉仕した感動は、一人の人間の生涯の礎として吾が身を見守っていてくれる様に思えてならない。文学にも人間にも停年はない、日々一本ずつ確かな杭を打込めという河野仁昭先生の至言に素直に従いたいものである。

(女子中学・高等学校教諭)

同志社校地出土の埋蔵文化財(10)

鈴木 重治

伏見人形・犬猿相撲ふしみにんぎょう けんえんずもう(江戸時代)



(中学校新彰栄館増築地点・第二遺構検出面出土・高さ8.6cm)

満面に笑みをたたえた犬と、柔和な表情の猿に、四つ相撲をとらせている姿が、ほほえましい。

灰白色の粘土を素材として、ニギリ、マゲ、ハリツケ、ナデ、オサエ、キザミなど、きわめて単純な手法で造形している。つぶさに観察すると、犬の脇腹や猿の手足

の一部が変色していて痛々しいが、これは二次的な熱、つまり火災による火熱を受けた証拠でもある。宝永五年(一七〇八)の京都大火によるものであるうか。出土の層位と、相伴資料などから、江戸時代の前期の作品と考えられるが、後世の多くの型づくりの伏見人形と違って、素朴さの中に豊かな表現が認められる。

伏見人形は、伏見稲荷社の参詣人の土産物であって、形づくりの素焼の人形に、白、赤、黄、緑などの彩色を施した郷土玩具の一種である。稲荷から深草にかけて産出する良質の粘土が使われたという。江戸時代の最盛期には、稲荷社近くの伏見街道には、五〇余りの窯元と、十数軒の店舗が軒を並べたというが、現在では二、三の窯元を数えるにすぎない。

なお伏見人形の代表的なものは、稲荷社の神使とされる「狐」や「布袋」、「大黒」、「鳩」、「天神」、「牛」、「馬」、「犬」などであるが、同志社校地内の発掘調査で出土した伏見人形の中には、箱庭に用いた「塔」や「橋」をはじめ、ママゴト遊びの「鍋」、「釜」、「竈」などのミニチュアも含まれている。

(同志社大学校地学術調査委員会調査主任)